

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No. 10 CONTENTS

The spread at ritsuryo system in Ancient Satsuma province, Osumi province, and Tane province

-Analysis of archaeology survey result-
Kawaguchi Masayuki

Ground construction and occlusion method of wood in Tachionobori underground corridor-style burial chamber

Shinichiro Fujishima

The structure of the pit dwelling of Yayoi period in Kagoshima Prefecture Osumi Peninsula

Tatumi Yubazaki

About red pigments in the underground corridor-style burial chamber type grave ~ From consideration in Tationobori Site ~

Takeyasu Masayuki

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the 28th year in Heisei

Kagoshima Prefectural Archaeological Center

March 2018

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第10号

古代の薩摩・大隅国，多禰嶋における律令制度の普及
-考古学の調査成果から-

川口 雅之

立小野堀地下式横穴墓群における地表構造及び木材閉塞方法

藤島 伸一郎

鹿児島県大隅半島における弥生時代中期の
堅穴住居跡の平面構造について

湯崎 辰巳

地下式横穴墓の赤色顔料について
-立小野堀遺跡の検討をとおして-

武安 雅之

平成28年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2018.03

研究紀要・年報

縄文の森から

第10号

二〇一七

鹿児島県立埋蔵文化財センター

『縄文の森から』第10号 目次

古代の薩摩・大隅国，多禰嶋における律令制度の普及 —考古学の調査成果から—

川口 雅之 1

立小野堀地下式横穴墓群における地表構造及び木材閉塞方法

藤島 伸一郎 19

鹿児島県大隅半島における弥生時代中期の竪穴住居跡の平面構造について

湯場崎 辰巳 35

地下式横穴墓の赤色顔料について ～立小野堀遺跡の検討をとおして～

武安 雅之 49

平成28年度年報 57

立小野堀地下式横穴墓群における地表構造及び木材閉塞方法

藤島 伸一郎

Ground construction and occlusion method of wood in Tachionobori underground corridor-style burial chamber

Shinichiro Fujishima

要旨

立小野堀遺跡は、5世紀前葉から6世紀前半にかけて笠野原台地の縁辺部に形成された、南九州特有の墓制である地下式横穴墓の集団墓地である。平成22年度から26年度にかけて、現時点で1遺跡で最多となる190基の調査が行われた。多くの地下式横穴墓を調査する中で、今まで不明な点が多かった墓域の地表構造及び地下式横穴墓の木材閉塞方法の解明につながる事例がみられた。地表構造として、周囲を溝で囲んだ方形の小墳丘が多数存在し、その溝部分に地下式横穴墓や土坑墓を築造していた。また墓群内の地下式横穴墓は主に丸太状の木材で羨門の閉塞を行い、最下層に玄室を掘削した埋土を敷き、その上に横に木材を置き、長い場合は側壁に抉りを入れ、短い場合は固い埋土を補助的に置くなどの工夫を行っていたと考えられる。

キーワード： 地表構造 小墳丘 溝状遺構 土器分布 被覆土(埋土) 木材閉塞

1 はじめに

地下式横穴墓は南九州の古墳時代にみられる墓制であり、現在まで千基以上の調査が行われているが、まだ未解明な部分が多い。そのような中、平成28年度に報告書が刊行された立小野堀遺跡では、残存状態の良い区域や遺構から地下式横穴墓群における多くの情報を得ることができた。中でも地表構造や木材閉塞方法について、解明につながると考えられる事例を報告書に記載しているが、これまでの他遺跡の事例や研究をふまえ、立小野堀遺跡における事例について、あらためて整理することとしたい。

2 地表構造及び木材閉塞に関する事例及び先行研究

(1) 地表構造

まず前方後円墳や円墳などの高塚古墳との関係において、宮崎県では西都市西都原古墳群・国富町六野原・宮崎市下北方・宮崎市生目・高鍋町下耳切、鹿児島県では鹿屋市岡崎・大崎町神領などの古墳群で古墳の墳丘下に地下式横穴墓を構築している(東2001・甲斐2011等)。こうした共存関係を示す例は地下式横穴墓の初現期や終末期でもみられており、この墓制が継続する全期間において続くと考えられる。また地下式横穴墓を主体とし構成される宮崎県えびの市小木原・馬頭・島内地下式横穴墓群などで「以前は小さな盛土があり、開墾によって削平された」との聞き取り記録がある(田中1974)。こうした記録や古墳と共存している墓を参考に、宮崎県内陸部の地下式横穴墓群においては、主軸奥壁方向が求心性をみせる形で築造されている場合、その中心部に墳丘の存在を想定している(中野1998・吉村2011等)。実際に検出を行った例として、鹿児島県大崎町下堀7号地下式

横穴墓においては、竪坑上部に小墳丘状の盛土が確認された。また島内地下式横穴墓群においては、竪坑の上面及び周囲に遺構の排土である砂礫混じり土の高まりが確認されたことや、その他の排土の残存状況などから、竪坑や玄室上部に排土を盛り上げたとの指摘がある(大西1999)。

古墳に伴う地下式横穴墓群は、墳丘の大小はあるものの、周溝に竪坑を構築することや墳丘が存在することに關しては明白である。地下式横穴墓のみで構成される群は、伝承や古墳と共存する例を参考に、墓の位置や玄室奥壁の向きで小墳丘があったと推測するにとどまり、その高さや形状が分かる例はない。竪坑上部などを中心に小墳丘を築くものも、実測例は下堀7号の1基のみであり、切り合い関係の無さや遺構掘削時の排土が見つからないことから推測されたものである。

(2) 木材閉塞

羨門を閉塞する方法として板石・土塊を用いる例があり、閉塞物が見つからない場合は木材(特に板)によるものとされる。それらの閉塞物別で家形系や土坑系などの墓形態、年代や地域による分布の違いについての研究が行われている(近沢2011)。しかし、木材の形状や閉塞の方法に関する研究はみられず、報告書における記録も少ない。記録の一例を上げると、崩先地下式横穴墓群では、竪坑側壁の抉りや床の溝で「丸太」による閉塞の可能性を記述しており、確認できた分において、「丸太」に言及した初の例である。生目古墳群43号地下式横穴墓や鹿児島県鹿屋市町田堀地下式横穴墓群においても「丸太」と推測している。下耳切・宮崎県西都市堂ヶ嶋地下式横穴墓群では、木板嵌め込み溝や竪坑側面の窪みから、木板を立てかけてかんぬき状の押さえを行っていた可能

性を指摘している。神領3号地下式横穴墓では、羨門上部の切り欠きから、板材と推測している。いずれにしても堅坑側壁や床面の溝等、壁面の形状で推定するものがほとんどで、埋土で形状を推定したものはほぼみられない。

3 立小野堀遺跡の層序

地表構造や閉塞方法を考える上で、地層に関する情報は不可欠である。立小野堀遺跡の層序については、Ⅱ～Ⅴ層が黒色土となっておりわずかな違いしかない。またⅡ・Ⅴ層は旧地形が深い箇所で見つかっており、多くの箇所はⅢ・Ⅳ層が堆積する。Ⅵ層は白黄色で2cm程度の池田降下軽石を多く含む黒色土層、Ⅶ・Ⅷ層はアカホヤ土の斬移層とアカホヤ土（橙褐色土）、Ⅸ層は粘質のある黒色土、Ⅹ～Ⅻ層は縄文早期該当の黄澄パミスを多く含むやや固い黒色土層である。埋土などで混合された場合、量にもよるが、Ⅱ～Ⅴ層の黒色土にⅦ・Ⅷ層土やⅩ～Ⅻ層土がどの程度の割合で含まれているかの判別は可能である。特に被覆土(埋土)に関しては、黒色土にⅦ・Ⅷ層土が混合されているかで確認を行っている。

4 立小野堀遺跡における地表構造及び構築順序

地表構造について、遺構周辺に分布する被覆土(埋土)や土器分布について分布の特徴を述べ、次に3条検出された溝状遺構の埋土について堆積状態の検討を行い、そこから推測できる地下式横穴墓群の地表構造やその構築順序について検討を行う。なお、以後「第〇号地下式横穴墓」は省略して「〇号墓」もしくは「ST〇」と表記する。

(1) 土器分布及び被覆土(埋土)

墓域の東側を中心に、堅坑上面や周囲にⅦ・Ⅷ層(アカホヤ土)等の混合土(報告書内では「被覆土」と記述)や土器分布がみられる。ただし、ゴボウ作付による深耕の影響や、戦前の耕地整理の影響を考慮すると、古墳時代の地表面の多くが破壊されており、検出されなかった場所にも多くの土器や埋土(被覆土)があったと考えられる。特に40区以西は旧地形が高く、部分的な検出にとどまっており、残存度が極めて良いのは、旧地形が低いH-I-41・42区の127号墓周辺、H-I-45・46区(45区西側上面は旧地形が高く、耕作やパイプ敷設により削平を受けており除く)の156～159号墓周辺で、この範囲では地表構造の検討が可能である。この範囲で地下式横穴墓とその周辺の遺物分布及び堆積土(被覆土)を検討すると、以下の特徴がみえる。

ア 土器分布(第1図参照)

平面観は、127号墓周辺では主に墓の堅坑左右から玄室前方を方形で囲むように分布している。また156～159

号墓周辺では同じ地点を向く墓同士の玄室前方を方形で囲むように分布する。これらの土器分布は溝状遺構や被覆土(埋土)と重なることが多く、分布が重複する範囲では特に多く出土する傾向がある。どちらも玄室前方の土器片や被覆土(埋土)で囲まれた範囲には極めて少ない。

断面図で土器の垂直分布をみると、方形で囲まれた土器が少ない箇所にかけて高くなっていき、堅坑上面付近に集中し、その後方にはほぼ同じ高さかやや高い位置に分布する傾向がみられる。

イ 被覆土(埋土)(第1図参照)

被覆土(埋土)の平面観は、同じ地点を向く墓の堅坑を方形で結ぶように分布する。156～159号墓周辺は、159号墓から西側においては旧地形が高く、上面攪乱を受けており「コ」の字状となるが、162～165号墓周辺では方形に近くなる。

断面図による垂直分布では、堅坑検出面付近で土器より下側に位置し、堅坑後方にみられる場合もある。残存度が悪い40区以西でも、検出できた箇所では同様の傾向を示す。なお127号墓の北西部分では、Ⅵ層より上の部分において、微量のⅦ・Ⅷa層土が含まれた部分がみられた^(註1)。これは、被覆土(埋土)の一部と考えられる。

(2) 溝状遺構(第2・3図参照)

Ⅵ層以下まで掘り込みがみられ、溝状遺構と確認できるものが、27号墓・28号墓・153～154号墓及び5号土坑墓周辺の3か所で検出された。これらには以下のような共通点がみられる。

3基において埋土を検討すると、主に4層に分かれる。最上層と上から3段目は黒色土中心層(Ⅶ・Ⅷ層土割合微量)、上から2段目と最下層は黒色土内のⅦ・Ⅷ層土割合が多い層である。

この堆積状態を検討すると、上から2段目は、154号墓と27号墓の例により、造墓時の排出土であることがわかる。最下層はⅦ・Ⅷ層土が多いので、造墓時の掘削土でないならば、溝を掘りあげた際の埋土と判断できる。上から3段目は黒色土割合が高いため、溝より高い面にあった黒色土を中心とした土が溝に流入し自然堆積したもので、溝と墓との構築時期の差を示す埋土であろう。最上層は墓が溝部分に造られた後に堆積した黒色土で、これが一定の時期(ほぼ同時とみられる例もある)を経て堆積した後、土器が上面に散布されたと考えられる。

なお、溝が検出された部分は全てⅥ層以下まで掘り込まれた部分であり、掘り込みがⅢ・Ⅳ層付近までしか達していない場合は埋土が全て黒色土主体となるため、溝状遺構として検出できなかった可能性が高い。被覆土(埋土)が部分的に検出された箇所については、その部分に溝状遺構が存在し、黒色土(Ⅲ・Ⅳ層土)でやや埋まった後、墓の構築時に被覆土(墓の掘り上げ土)が入ったと推定できる。

(3) 堅坑上部付近の盛土(第4図参照)

堅坑上部で盛土と考えられる土層がみられたものとして6号墓がある。しかし、黒色土に含まれる微量のⅦ・Ⅷ層土で分別しており見極めが難しいこと、上部に広がる須恵器を中心とした遺物が堅坑左右軸に対し山状とならずほぼ水平に分布すること、他の墓においても水平にしか分布しないことから、排土を盛り上げた可能性は低い。また排土を玄室上部に置いた痕跡を探したが、47号墓1基のみの検出であり、旧地形が深く残存度が良い墓においても痕跡は見られなかった。

(4) 墓同士の切り合い(第5・6図参照)

墓群内において、74・75、80・81、157・158号墓の3例がみられる。いずれも堅坑側面付近で切り合っている。

80・81号墓と157・158号墓の場合、玄室は同じ方向を向いており、同群に属する墓同士と考えられ、81号墓は80号墓の、157号墓は158号墓を避けるように玄室を構築しており、少なくとも堅坑構築時には先に構築された墓の玄室位置が分かっていたと考えられる。また、74号墓が75号墓の堅坑を切っている。74号墓は堅坑構築時に切り合いに気づいたはずだが、玄室も75号墓の堅坑を切っている。位置関係や被覆土により、74・76・96号墓が同群で、75号墓は異群であったため、玄室位置を考慮することが無かったと推測される(第9図の74・75号墓付近を参照)。

また、切り合いかけた例として、24・25号墓がある(第6図参照)。24号墓は北側の玄室を埋め戻しており、北玄室は25号墓に極めて近いことから、造墓中に位置に気づき、玄室を南側へ作り替えたと推測される。これらを見ると、同群に属する墓の堅坑のおおよその位置と、堅坑から玄室の方向は分かっていたが、堅坑から玄室を見て横側(左右側)ははっきりとは分からなかった可能性が高い。

(5) 地表構造

以上の調査結果により、地下式横穴墓周辺の地表構造及び構築順序は次のようなものであったと考えられる。

ア 土器や被覆土(埋土)によって方形に囲まれた箇所には土器がみられないことや、この箇所に向かい土器が低角度で高くなる垂直分布から、方形の墳丘の存在が考えられる。その場合、墳丘の大きさは箇所により異なるが、平均して一辺約5～7mとなる。墳丘の高さは、垂直分布する土器の角度から、低墳丘であったと推測される。

イ 被覆土(埋土)部分は、溝であった箇所には遺構構築の際の掘り上げ土が堆積したと考えられる。被覆土がみられる墓群においては、その平面形は堅坑をつなぐように方形をなす。

ウ 墓の切り合い例が極めて少ないことから、墓の位置に目印となるものがあったと考えられるが、堅坑や玄

室上部に排土を盛り上げていた痕跡は極めて少なく、墳丘及び溝を共有するグループで墓の位置を伝達していたと推測される。また、堅坑側面で切り合いがみられることは、溝部分に墓を構築していたことを補強する。玄室上部や墳丘推定地でⅦ・Ⅷ層土を混合した埋土(遺構掘り上げ土)がほぼ見られなかったことは、墓を構築する前に地表上のⅢ・Ⅳ層(黒色土)部分で溝及び墳丘を作り上げていた可能性が高いことを示す。ただし、排土を墳丘の上に置き、耕地整理時等で削平された可能性はある。

エ 土器の垂直分布及び溝の埋土より、破砕した土器が広がる際は、墳丘と溝の高低差は、地表部における黒色土(Ⅱ・Ⅲ層土)の自然堆積により小さくなっていた。

なお、墓域としての土地利用が終焉した後の地層堆積を示す事例として、127号墓の北側を中心とする墳丘東側の土器集中部分に青コラと考えられる火山灰が土器片に付着した状態で検出されている(第1図参照)。青コラの年代は7世紀末頃であるため、127号墓付近の造墓が行われた5世紀後半から7世紀末まで約2世紀にわたり、溝は残存し、一部の土器は露出した状態であったと考えられる。

(6) 構築順序(第7図参照)

以上から、立小野堀遺跡における地下式横穴墓の構築順序を第7図に示した。なお、図中における右溝のようにⅥ層以下まで溝が掘り込まれない場合、黒色土であるⅢ・Ⅳ層土にはほぼ同じ土が入り込むため、溝と判断することは難しく、溝部分に入った被覆土(埋土)や土器片のみ検出される。墓域内の被覆土や土器片のみの検出箇所は、このようにⅢ・Ⅳ層までしか掘り込まれなかった溝があったと考えられる。

(7) 他遺跡の例(第8図参照)

他遺跡で地下式横穴墓群の地表構造について検討する材料となるのは、玄室の方向で推測するものがほとんどで例が少ない。しかし、近年調査された町田堀遺跡では、1～3号円形周溝墓において溝状遺構に同様の堆積がみられる。また、島内地下式横穴墓群69～75号墓では、堅坑周辺の土取りが行われていたこと・堅坑上面や周囲に8層(砂礫層)を主とした砂礫混じりの土がみられ、玄室方向には広がらないこと、堅坑埋土に3層土(黒色土)が少ないことが記述されており、これは3層部分を掘削して溝及び小墳丘を構築し、その後、溝部分に墓を造り、遺構掘削土であるⅧ層土が溝部分や周囲に広がったと考えられる。これらの墓群においては、立小野堀遺跡の地下式横穴墓群とほぼ同じ構築順序であった可能性が高い。

(8) 遺跡内の溝及び墳丘位置(第9図参照)

遺跡内で残存していた被覆土(埋土)や土器の位置

で溝の位置を推定し、第9図に示す。なお、太破線は被覆土（埋土）や土器がみられた箇所、細破線は玄室の向きを参考に示した箇所である。そして溝の中央に墳丘が存在したと推定する。なお、溝を想定しなかった墓は、127号墓のように1基で溝及び墳丘を形成していた可能性がある。また遺跡内では、堅坑から見た玄室の方向が北向きの墓が多く、溝で囲まれた墓群をグループとすると、グループ内でも北向きの墓はほとんどでみられ、副葬品も優位に立つ例が多い。また32～34号墓など、玄室方向を同じ向きとし、直線的配置となる例もみられる。宮崎県都城市下川東牧ノ原地下式横穴墓群においては、北向きの墓の多さや副葬品における優位性から、北向きの墓によって墓群を設定・墳丘を築造した可能性が高く、また宮崎県高原町旭台地下式横穴墓群等で直線的配置がみられることが指摘されており（中野1998）、これらの例に類似している。

5 立小野堀遺跡における木材閉塞

(1) 閉塞に関わる事例（第10図参照）

190基の地下式横穴墓の閉塞方法については、土塊閉塞の4基を除くほとんどの地下式横穴墓においては閉塞材は見つからず、羨道前が空洞もしくは上部からの流入黒色土や堅坑埋土が崩れた軟らかい土であった。これらには以下のような事例がみられる。

ア 玄室を構築する層と堅坑床面に固められた埋土の層がほぼ一致し、強いしまりがある。また、この土は地表上のⅢ・Ⅳ層土（黒色土）が極めて少ない。

イ 羨道左右の堅坑側壁に挟りのある墓がみられる。

ウ 羨道左右の堅坑側壁付近に柔らかくほぐれた埋土がある場合と、固い埋土がある場合が見られる。

エ 残存状態が良い墓において羨道前で堅坑埋土断面図をとると、床面に堅い埋土が、その上に軟らかい土、その上が空洞、最上部に締まった埋土がみられる。

オ 羨道付近で炭化物が検出された墓がみられた。残存した炭化物は最も残存度の良い86・137・158号墓を参考にするると横に長い形状であった。

カ 炭化物は樹種同定よりクスノキがほとんどで、一部クスノキ科であった。

キ 127号墓などの堅坑側面埋土に残る閉塞材のものと考えられる痕跡は、丸太状の形状を残していた。

(2) 木材閉塞の順序（第11図参照）

ア～キの事例より、土塊閉塞以外の墓（羨道が攪乱を受けている墓を除く）は、木材を利用した閉塞であり、木材は丸太状のものを横に置き、長い場合は側壁に挟りを入れ、短い場合は硬い埋土で補ったと考えられる。各遺構の説明でも部分的に触れているが、第11図において、木材閉塞の順序について模式図を示した。

(3) 閉塞物について

閉塞物が置かれたと推定される位置に炭化物がみられたことから、閉塞木材の一部は、外面などを意図的に燃やし、炭化させたと考えられる。長期間の保存を考えての方法と推測される。樹種は、同定結果よりクスノキがほとんどで、一部クスノキ科の樹木を使用している。クスノキは当時はまだ希少な樹木であり^(註2)、樟腦の原料で、防虫剤や医薬品に使用される。よって、閉塞材はクスノキを主に選んで使用していたと推測する。

なお炭化物の年代測定によると、炭化物は墓よりかなり古い年代が示される例が多い^(註3)。古樹を利用した可能性も考えられるが、今後の測定方法の変化によって異なる結果となる可能性がある。

(4) 他遺跡の例（第12図参照）

他の地下式横穴墓において、主軸埋土断面に木材閉塞と推定される、立小野堀遺跡と類似した事例を紹介する。宮崎県串間市崩先地下式横穴墓群3号墓や7号墓は、羨道前の埋土など、立小野堀とほぼ同じ主軸埋土断面である。また、板ではなく丸太による閉塞と記述されている。宮崎県高原町立切地下式横穴墓群20号地下式横穴墓は、玄室の埋土は記録されていないが、閉塞空間の土がしまりが無かったり、上部の埋土が割れて落下しているなど、木材閉塞と考えられる状態を示している。また25号墓における羨道前の埋土Ⅲは、上部から入り込んだ土であろう。町田堀地下式横穴墓群3号墓では、堅坑床面に固い埋土がみられない以外はほぼ同じである。ただし、現在までの全ての調査事例において言えることであるが、堅坑床面の埋土が玄室掘削土であれば、堅坑床面層土と同じになるため区別がつきにくく、固くしまりがある為に床面と誤解し、調査されなかった可能性がある。床面に固い埋土を敷く行為は、板石閉塞など他の閉塞方法でも同じであり、堅坑床面埋土を調査していない可能性がある事例も多くみられることに留意しておきたい^(註4)。

6 おわりに

立小野堀遺跡の調査において認められた、地下式横穴墓の地表構造や木材閉塞方法について解明するため重要な事例及び、推定される構造や順序等を検討した。

地表構造としては、遺構間における土器や被覆土（埋土）、溝状遺構などの位置や垂直分布により、地表上の遺構間に方形の小墳丘が存在したことが考えられる。これは、地下式横穴墓群における小墳丘の存在を推定していた宮崎県内陸部の例を追認するものであり、また方形とした形状は、これまで円形と推定されていたものを再考する契機となる。肝属平野には方墳は無く、南九州でも大変少ない。墳丘の形状が方形であることは、方形周溝墓の影響などが想定され、円墳や前方後円墳と共存する地下式横穴墓と系譜が異なる可能性が考えられる。鹿児島県志布志市京ノ峯遺跡や町田堀遺跡など、肝属平

野では方形周溝墓の影響を受けていると推測される墓群が存在することもその実証となろう。また27～29号墓においては、他の墓と異なり溝が大変深く、結ぶと直径は遺跡内で最大であり、形状は円形となるため、この周辺でIV～VI層より上部の多くが削平を受けていたことを考えれば、主体部を失った円墳であった可能性も残る（第9図参照）。

また地下式横穴墓の埋葬方法について、「木材閉塞」の具体的な順序や工夫の一部が明らかとなった。また木材閉塞の場合は、埋土断面記録において主軸だけでなく多くの断面を実測したり、閉塞物が置かれていた羨道前を丁寧に調査することが重要である。

今後も多くの地下式横穴墓の調査が行われると考えられるが、遺跡に残された情報を最大限くみ取る工夫を行い、更に多くの解明が進むことを期待したい。

【 註 】

- 1：立小野堀遺跡報告書第19図参照
- 2：鹿児島県立博物館（鹿児島県立埋蔵文化財センター元所長）寺田仁志氏によるご教示
- 3：立小野堀遺跡報告書第V章参照
- 4：例として鹿児島県湧水町北方1・2号地下式横穴墓など

【 参考文献・報告書 】

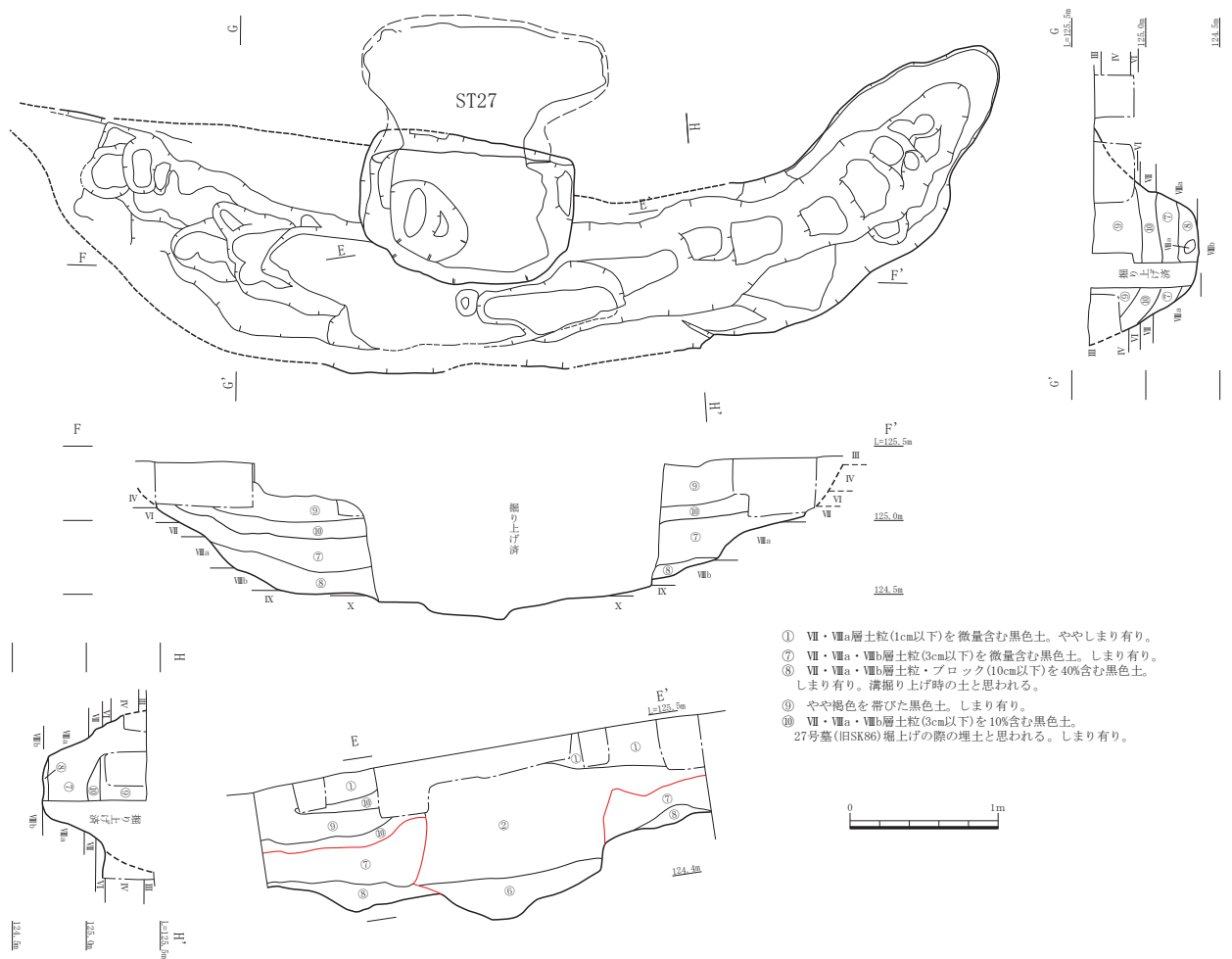
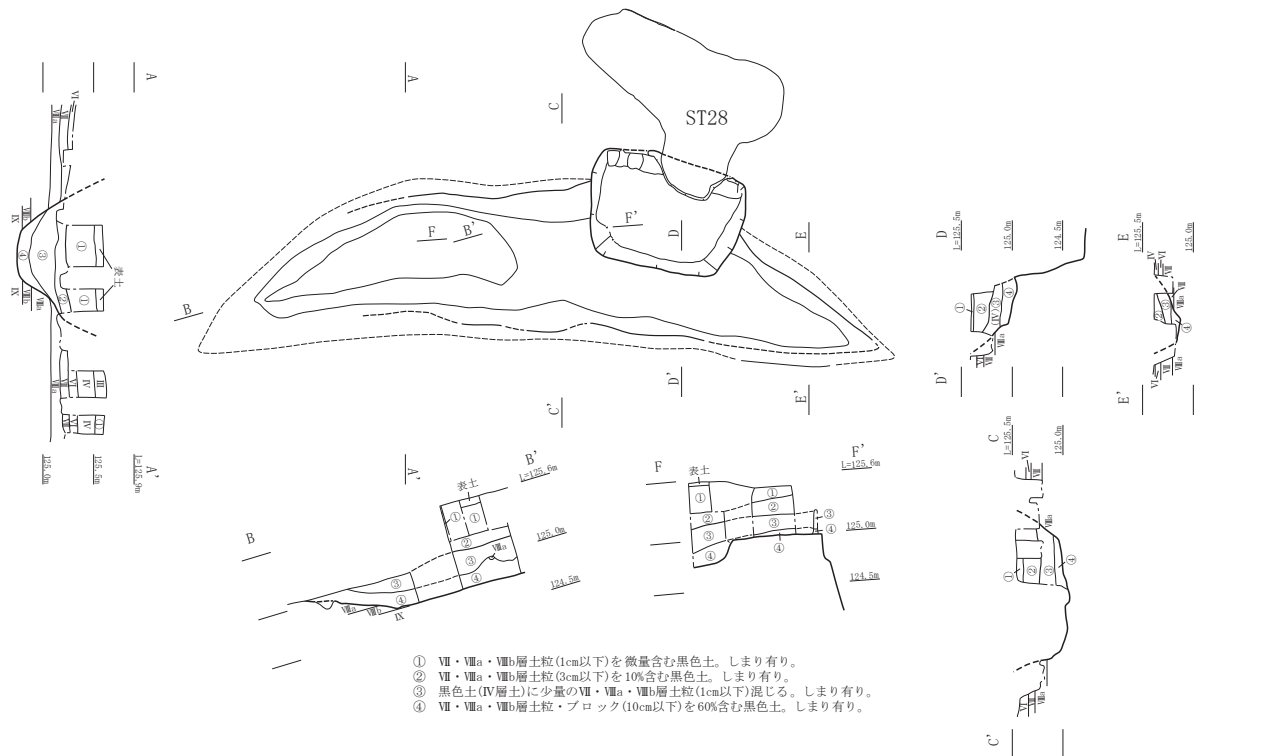
- (公財) 埋蔵文化財調査センター2017『立小野堀遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (16)
- (公財) 埋蔵文化財調査センター2016『町田堀遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (7)
- 大崎町教育委員会2005『下堀遺跡 大崎細山田段遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)
- 松山町教育委員会1993『京ノ峯遺跡』松山町埋蔵文化財発掘調査報告書 (7)
- 宮崎県教育委員会1993『崩先地下式横穴墓群』広域農道沿海南部地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 宮崎県埋蔵文化財センター2006『下耳切第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第125集
- 高原町教育委員会1991『立切地下式横穴墓群』高原町文化財報告書第1集
- 西都市教育委員会2003『堂ヶ嶋第2遺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第33集
- 竹中正巳・大西智和1999「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群69・70・71・72・73・74・75号発掘調査報告」『人類学研究』11 人類史研究会
- 甲斐貴充2011「地下式横穴墓研究の現状と課題」『地下式横穴墓研究の新展開』宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 近沢恒典2011「閉塞方法からみた地下式横穴墓の動態について」『地下式横穴墓研究の新展開』宮崎考古学会南例会実行委員会
- 中野和浩1998「地下式横穴墓の群構造」『宮崎考古 第16号』宮崎考古学会

東憲章2001「地下式横穴墓の成立と展開」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第一分冊 第4回九州前方後円墳研究会資料集 九州前方後円墳研究会

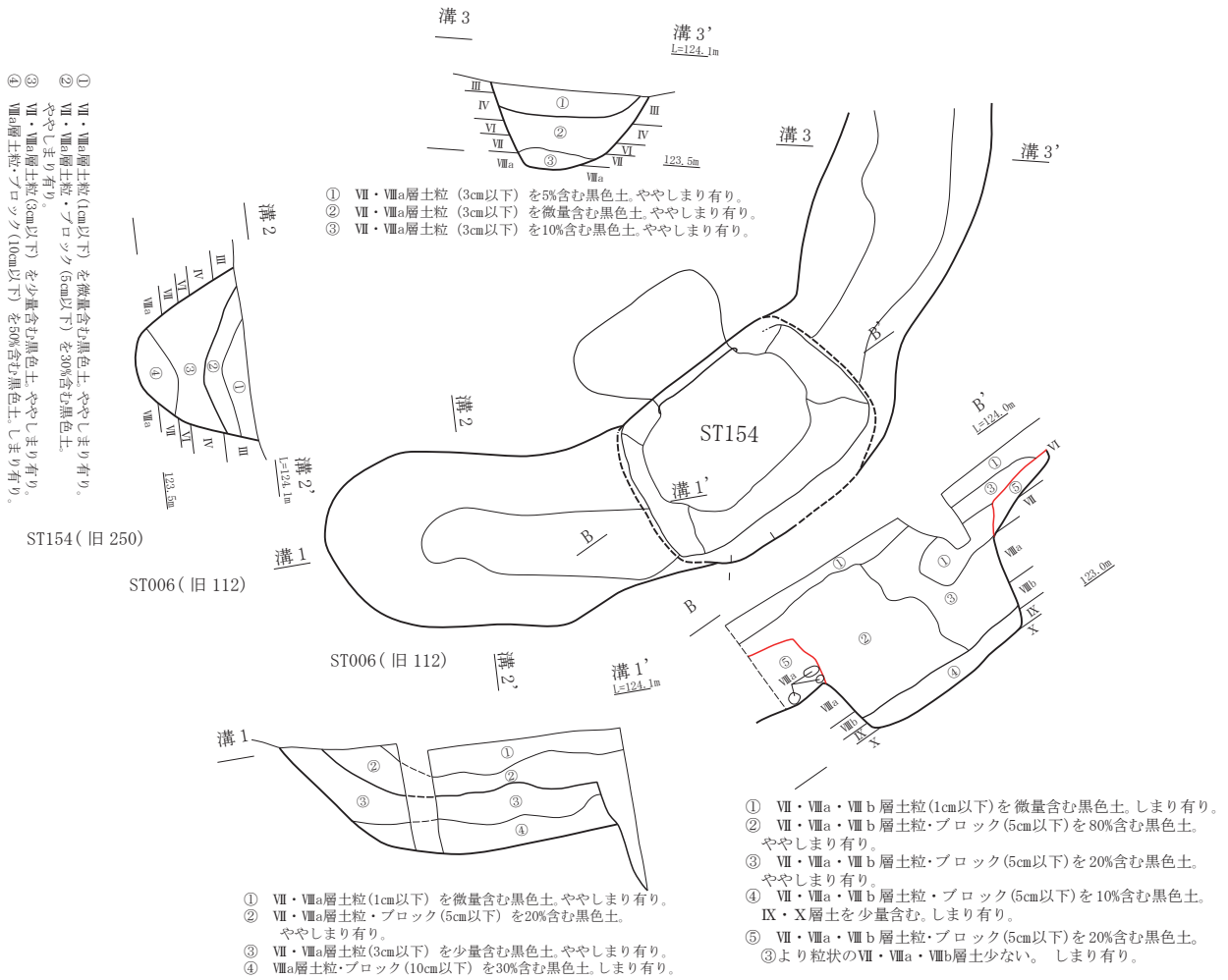
橋本達也2007『古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究』鹿児島大学総合研究博物館

橋本達也2008『大隅串良岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館

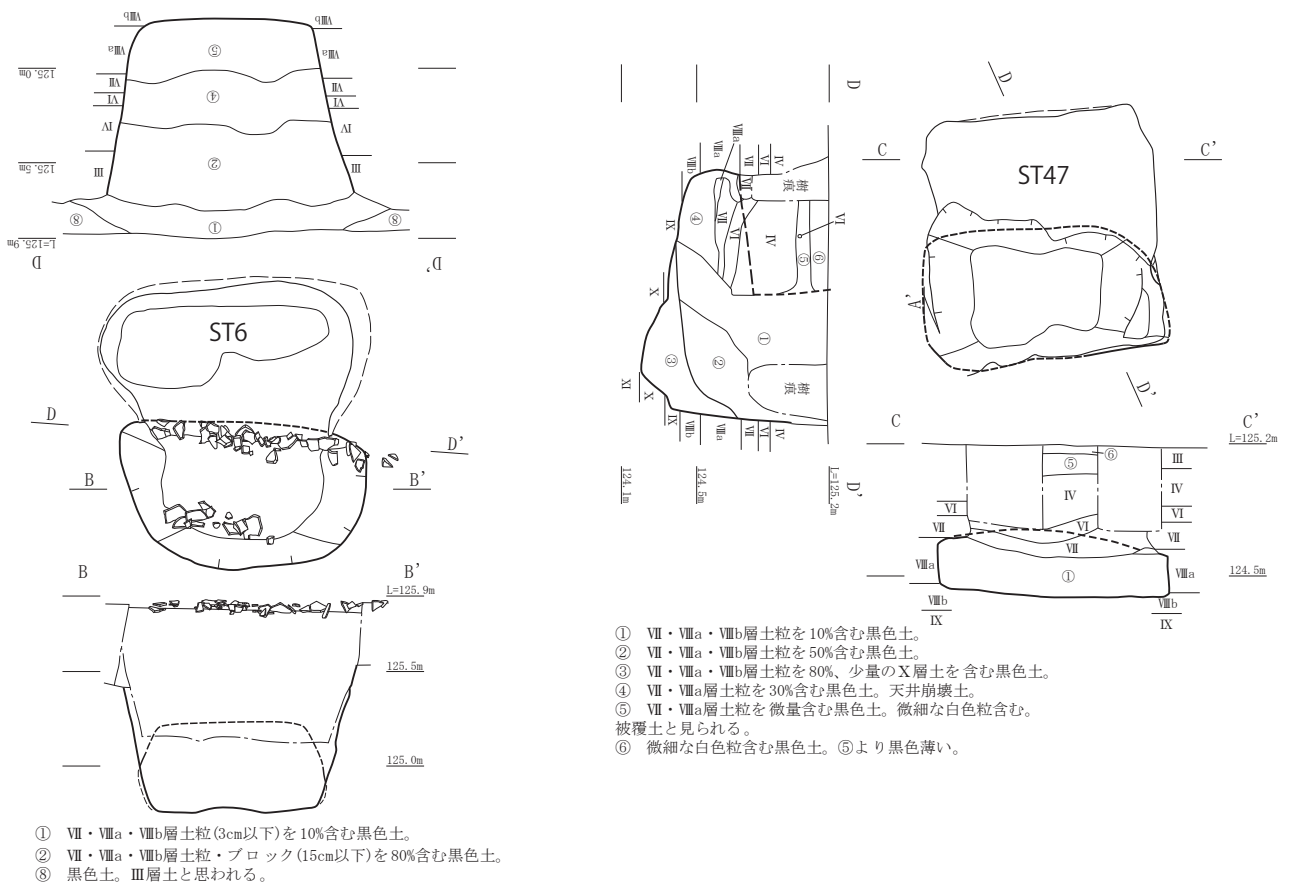
吉村和昭2011「宮崎県西諸県地域における地下式横穴墓の墓群形成と埋葬原理—立切地下式横穴墓群を対象として—」『九州考古学 第86号別冊』九州考古学会



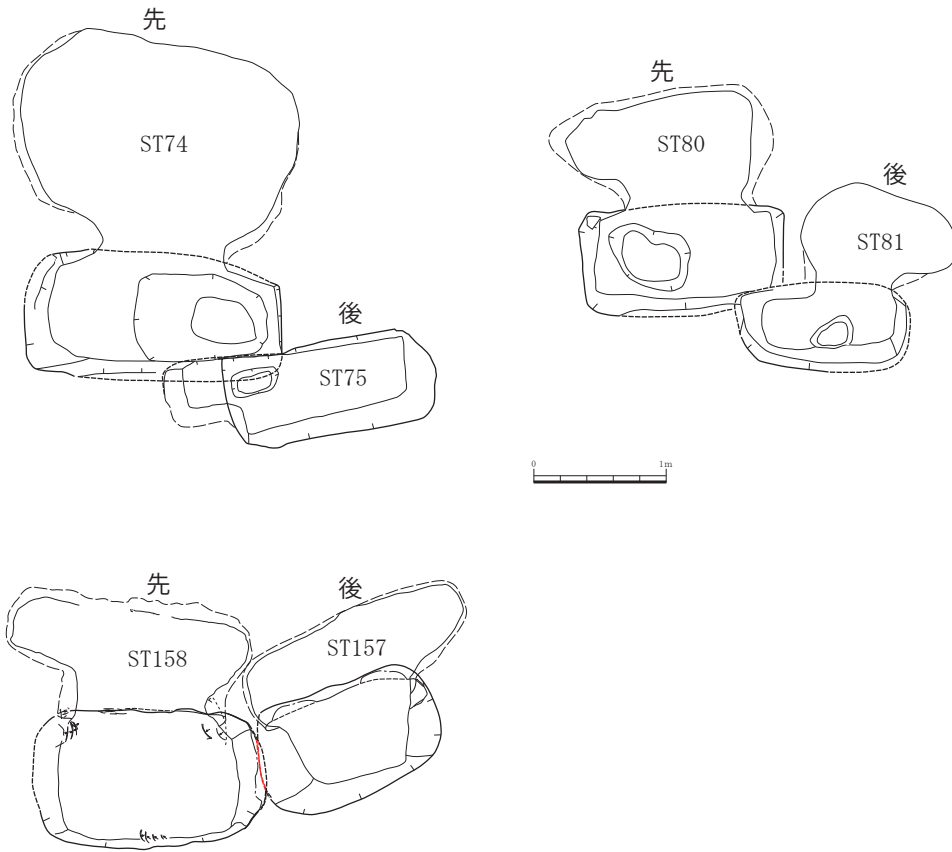
第2図 ST27・28 溝状遺構土層断面図



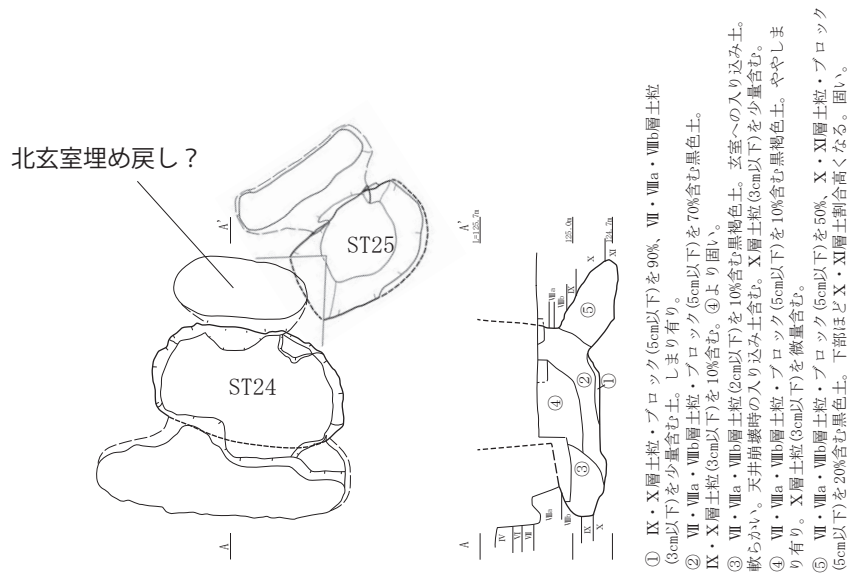
第3図 ST154周辺 溝状遺構土層断面図



第4図 ST6・47 見通し図・土層断面図

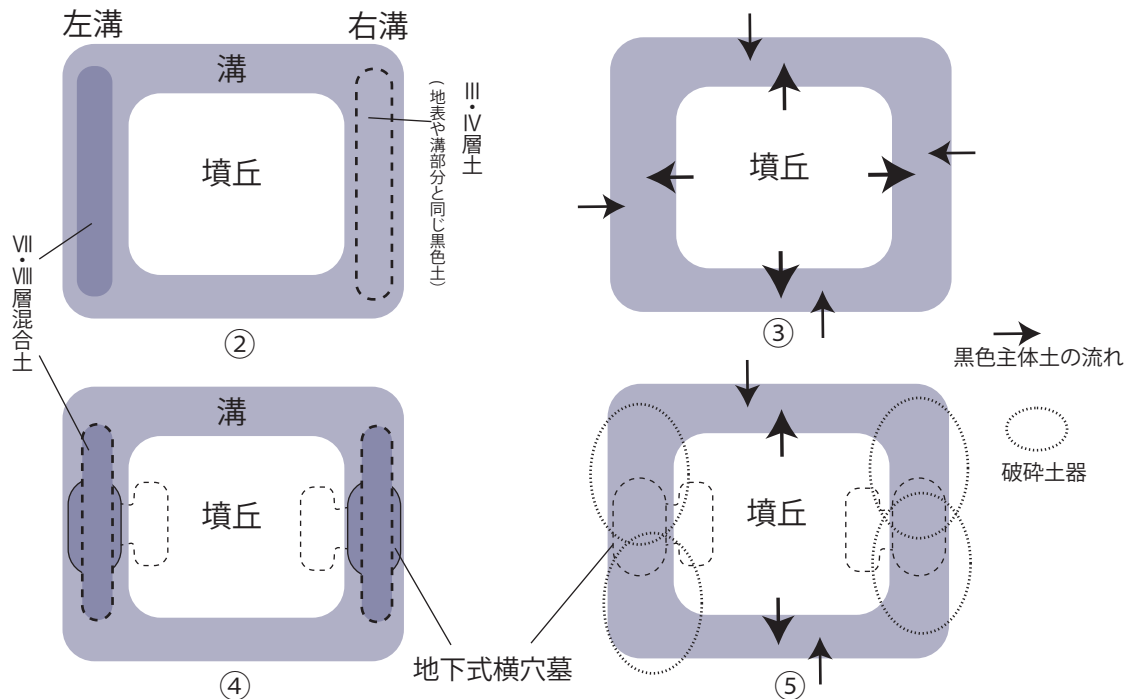
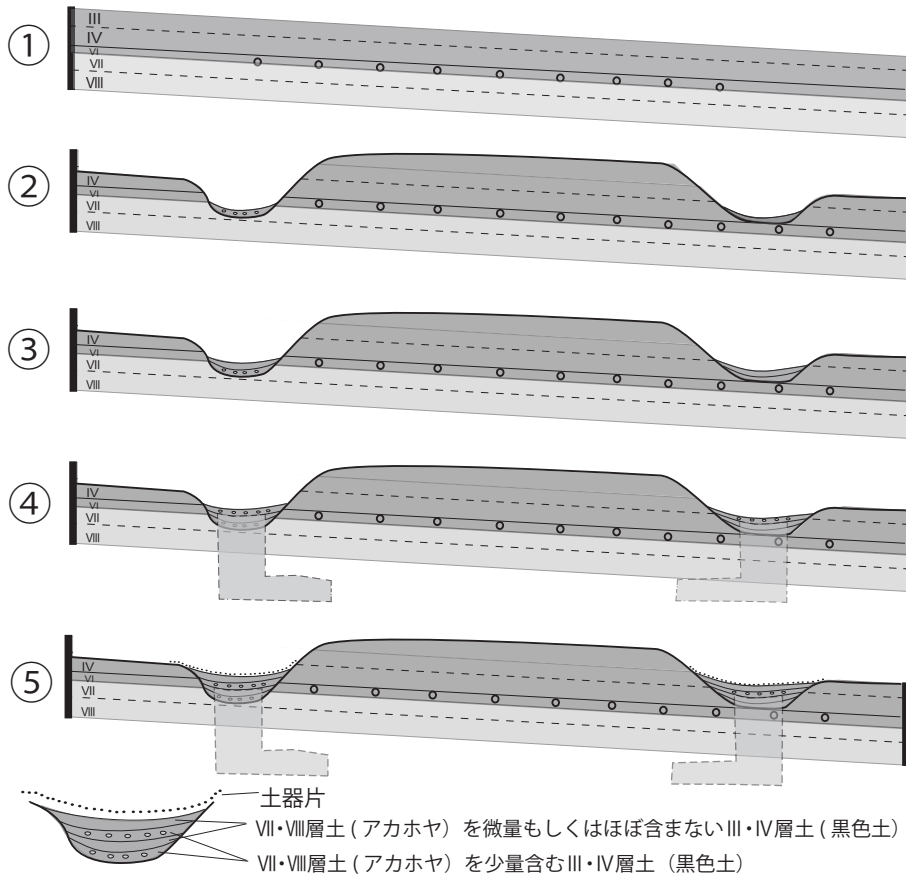


第5図 切り合い関係を持つ地下式横穴墓



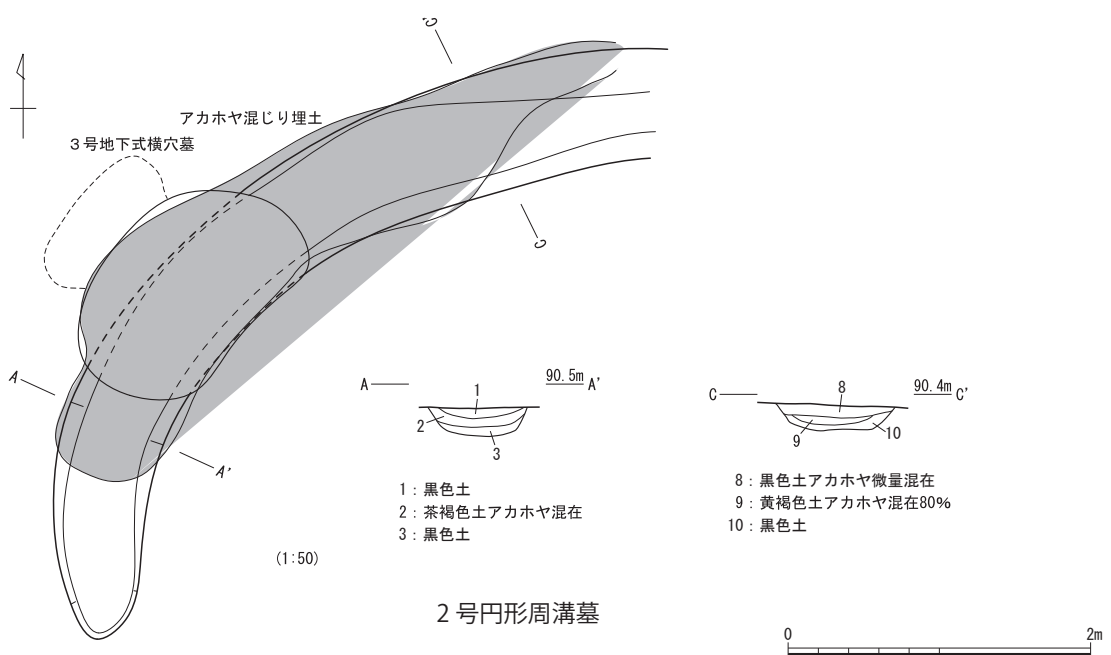
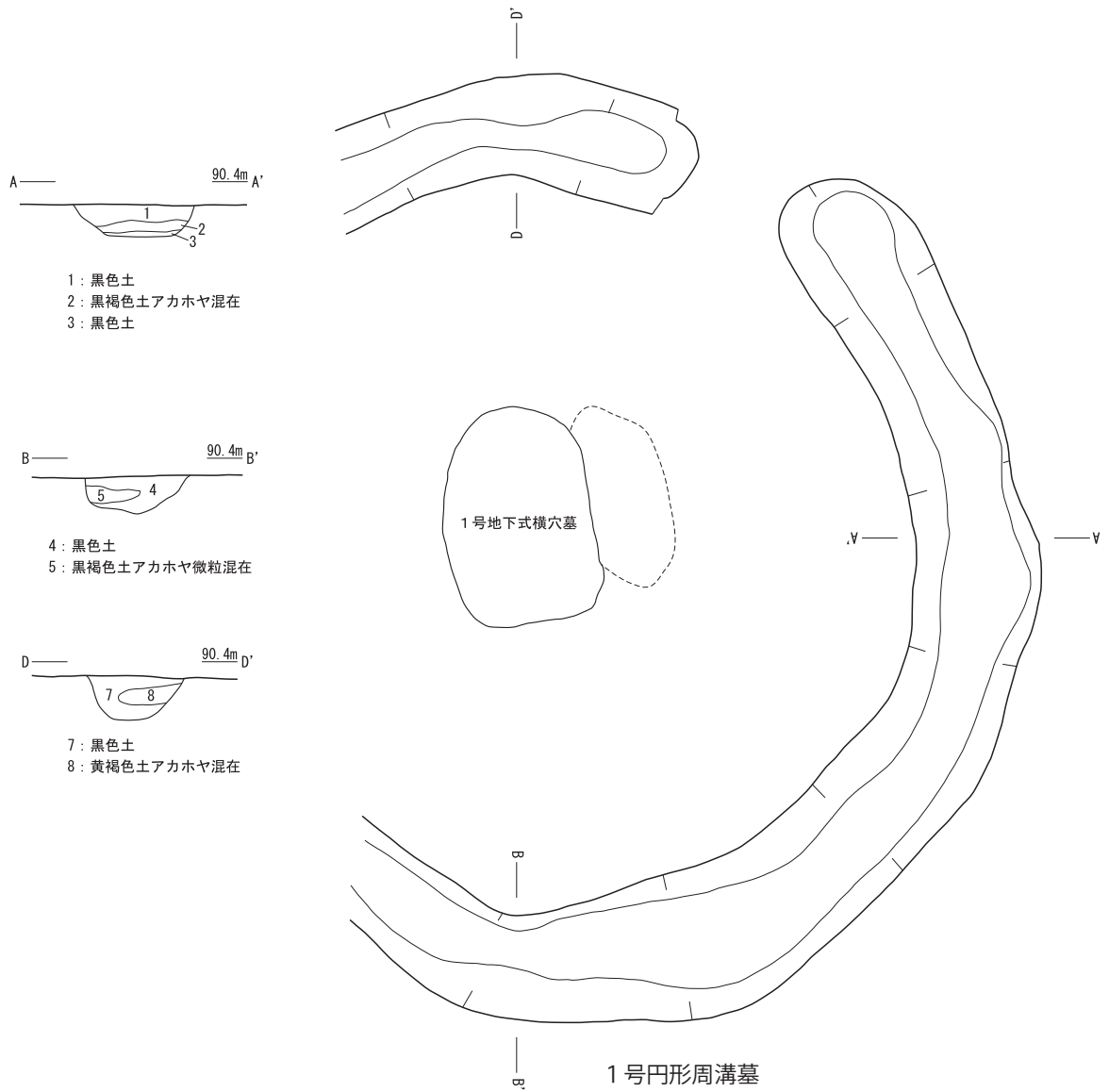
第6図 ST24・25 平面図と24号墓埋土断面図

左溝：Ⅶ層以下まで掘り込まれたもの 右溝：Ⅵ層までしか掘り込まれていないもの

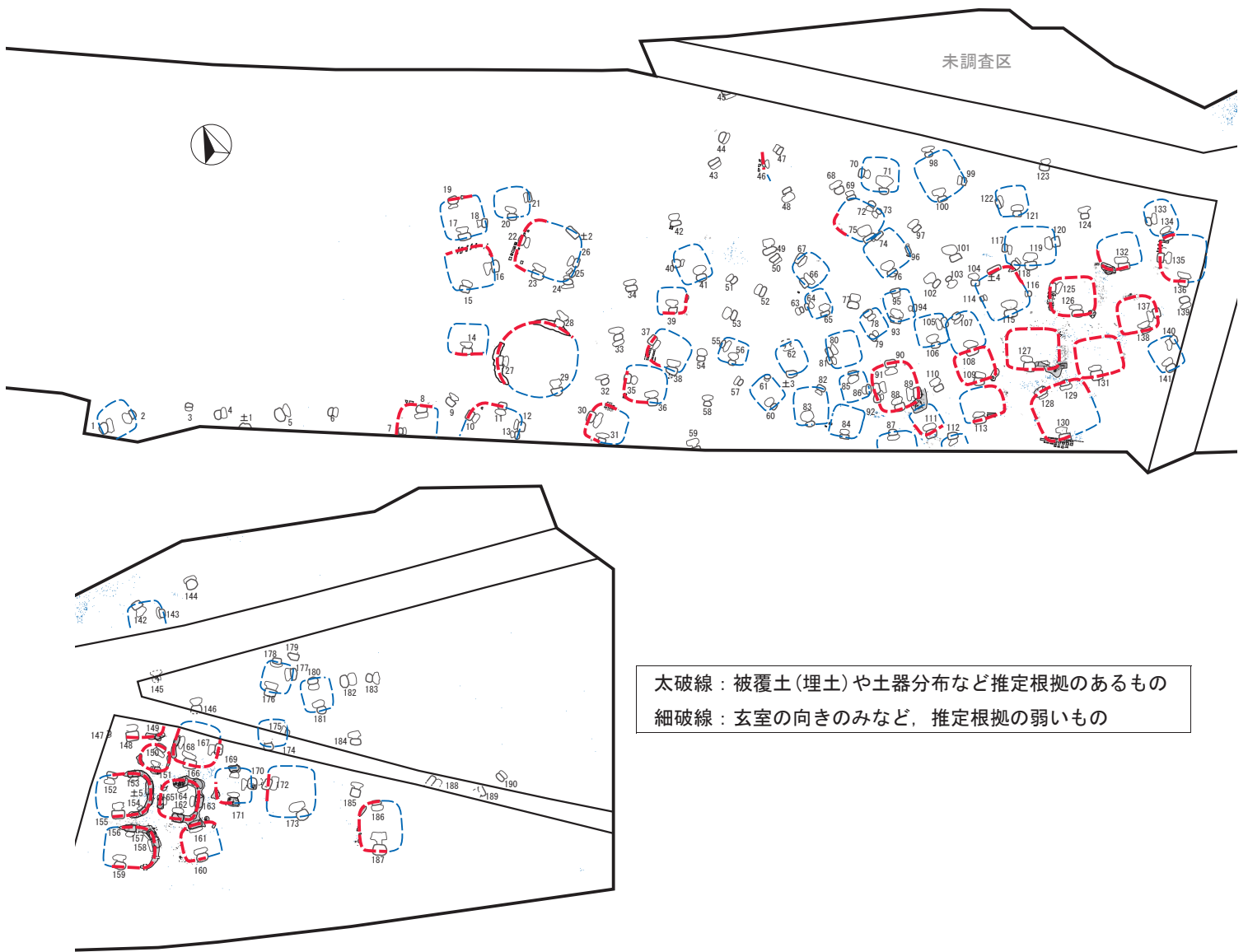


- ① 変更前の地形
- ② 墳丘及び溝を構築する。溝床面には掘り上げた土の一部が入る。
- ③ 墓構築までの期間に、墳丘上部などから黒色土を中心とした土が自然堆積する。
- ④ 溝部分に墓が構築される。墓の土は竪坑左右などの溝内にも広がる。
- ⑤ 土器散布までの間に、③と同じように黒色土を中心とした土が溝に自然堆積する。その後、土器が溝上や墳丘間を中心に散布される。

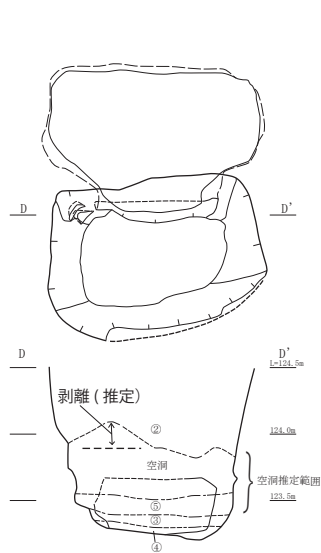
第7図 溝部分における地下式横穴墓構築前後の平断面模式図



第8図 町田堀遺跡における溝状遺構の埋土例

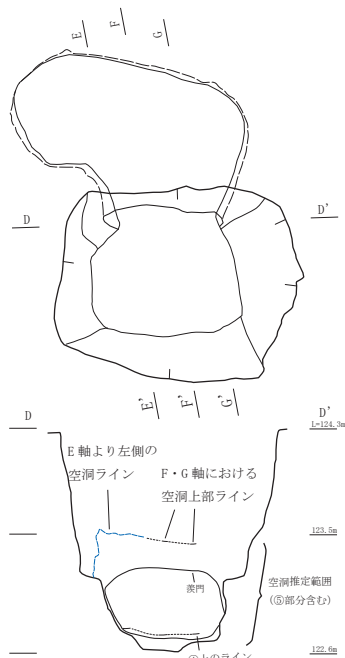


第9図 遺構分布域内 溝及び墳丘位置推定図



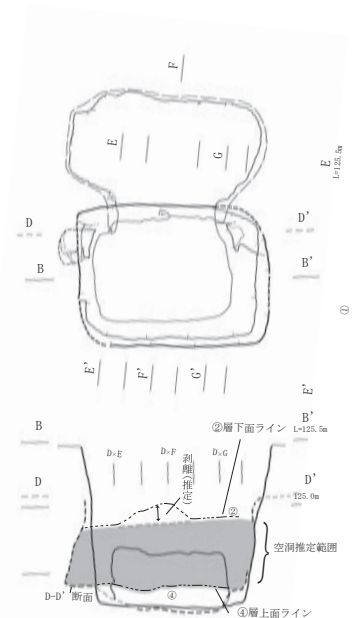
- ② VII・VIIIa・VIIIb層土粒・ブロック(5cm以下)を40%含む黒色土。X層土少量含む。ややしまり有り。
- ③ VII・VIIIa・VIIIb層土粒(2cm以下)を20%含む黒色土。IX層土を含み②よりしまり有り。
- ④ VII・VIIIa・VIIIb層土粒・ブロック(10cm以下)を80%、IX・X層土を10%含む黒色土。しまり有り。
- ⑤ ②の崩壊土。しまり全く無し。

ST109 羨道前埋土



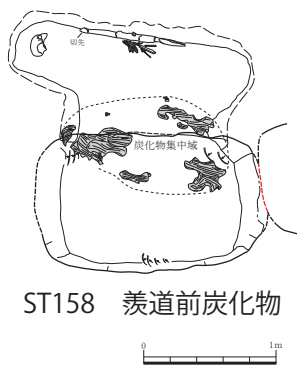
- ④ VII・VIIIa・VIIIb層土粒・ブロック(15cm以下)を90%含む黒色土。しまり有り。
- ⑤ ②③の崩壊土。軟らかく、ポロポロ崩れる。

ST127 羨道前の空洞範囲推定

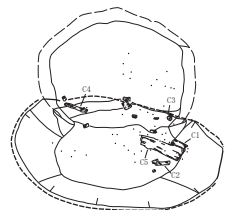


- ② VII・VIIIa・VIIIb層土粒・ブロック(15cm以下)を70%含む黒色土。ややしまり有り。
- ④ VII・VIIIa・VIIIb層土粒・ブロック(5cm以下)を10%、X層土を30%含む黒色土。しまり有り。

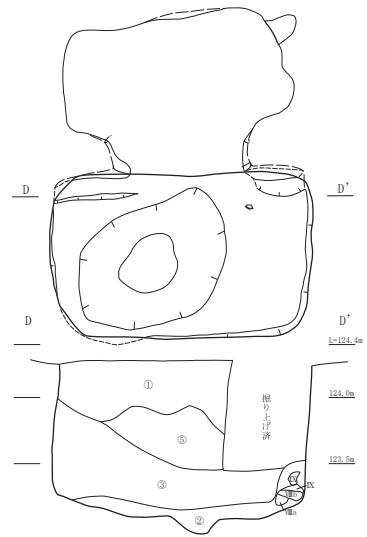
ST10 羨道前の空洞範囲推定



ST158 羨道前炭化物

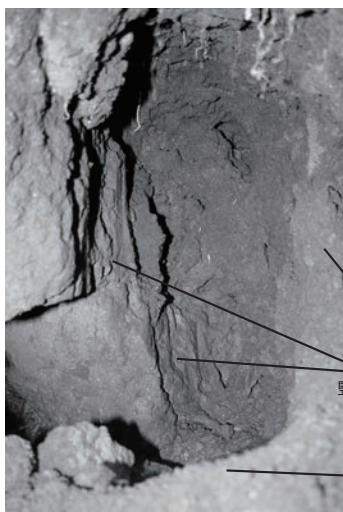


ST86 羨道前炭化物

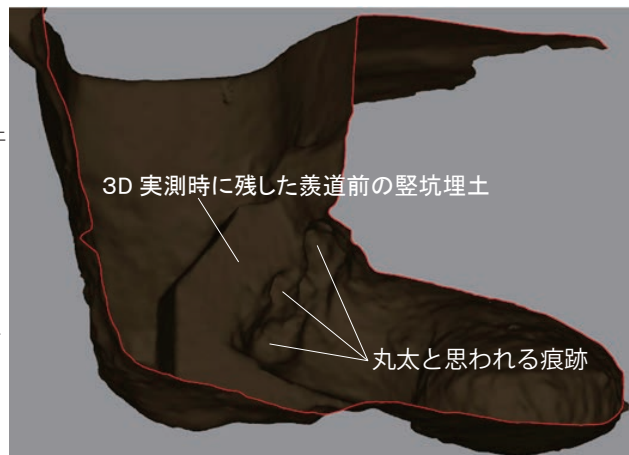


- ① VII・VIIIa・VIIIb層土粒・ブロック(10cm以下)を10%、X～XIII層土粒・ブロック(5cm以下)を10%含む黒色土。ややしまり有り。
- ② X～XIII層土を90%、VII・VIIIa・VIIIb層土粒(3cm以下)を少量含む黒色土。しまり有り。
- ③ VII・VIIIa・VIIIb層土粒・ブロック(10cm以下)を10%、少量のX～XIII層土を含む黒色土。軟らかい。
- ①の崩壊土と上部からの入り込み黒色土。
- ⑤ VII・VIIIa・VIIIb層土粒・ブロック(5cm以下)を少量含む黒色土。軟らかくしまり無し。上部からの入り込み土。

ST155 竪坑側壁付近の固い埋土

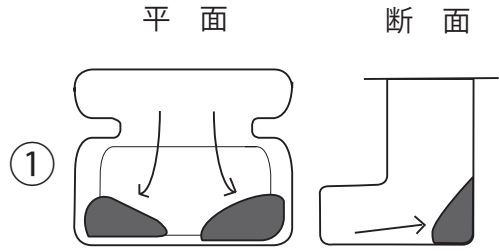


ST113 竪坑半掘時における羨門右側の空洞(羨道前中央から)

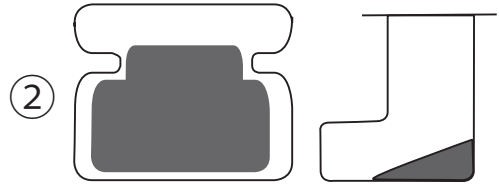


ST127 3D実測(羨道前埋土左側を残した状態)

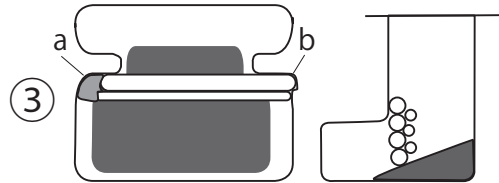
① 玄室を掘りあげた排出土を竪坑床面に残しておく。土搬出時の土台となった可能性もある。



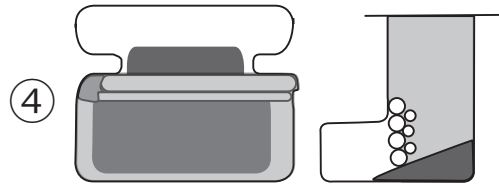
② 閉塞前に床面に敷き、踏み固める。黒色土(Ⅲ・Ⅳ層土)の少なさから、一度地表に上げることはないと推測する。



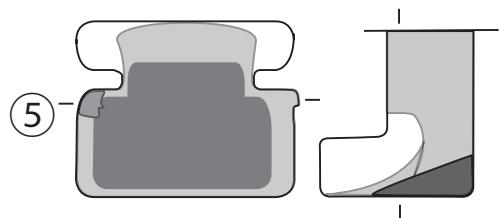
③ 丸太状のものを横に並べて閉塞する。閉塞材が短い場合はaのように固い土で補助し、長い場合はbのように側壁に抉りを入れる。



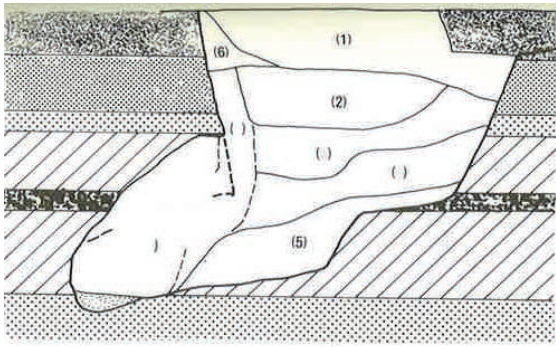
④ 竪坑を完全に埋める。



⑤ 一定期間経過後、木材は腐敗する。竪坑埋土は玄室へ流入し、上部との間に開いた隙間やモグラ穴などから地表上の黒色土も流入する。

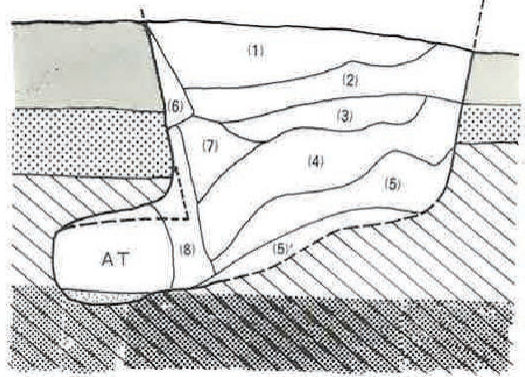


⑤の羨道前断面



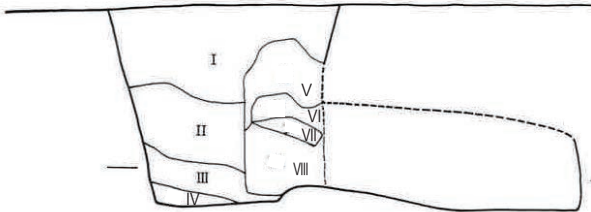
- (1): 暗褐色土
- (2): 黒褐色土に赤ホヤ細粒が混じる
- (3): 黒褐色土に赤ホヤブロックと黒色土が混じる
- (4): 黒褐色土に赤ホヤブロックと暗褐色粘質土の大きなブロックが混じる
- (5): 暗褐色粘質土
- (6): 黒褐色土
- (7): 2~4層の細粒が流入
- (8): 天井崩壊土と竪坑埋土流入土

崩先3号墓



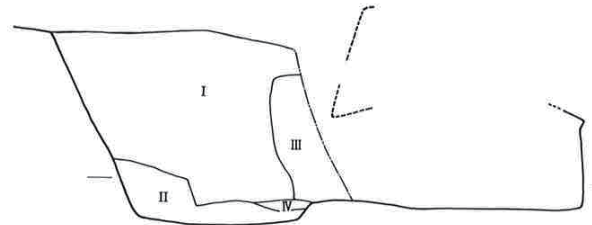
- (1): 汚れた黒褐色土に赤ホヤブロック、細粒が混じる
- (2): (1)より大きな赤ホヤブロックが混じる
- (3): 黒褐色土に赤ホヤの大きなブロックと黄褐色土+白砂の大きなブロックが混じり赤ホヤ細粒も多い。
- (4): (3)と同じだが、黄褐色+白砂ブロックを含まない
- (5): 赤ホヤ細粒を多く含む4層
- (5'): 地山と5層の漸移層
- (6): (1)と類似する
- (7): (1)と類似するがブロックを含まない
- (8): (7)に類似だが、やわらかい

崩先7号墓



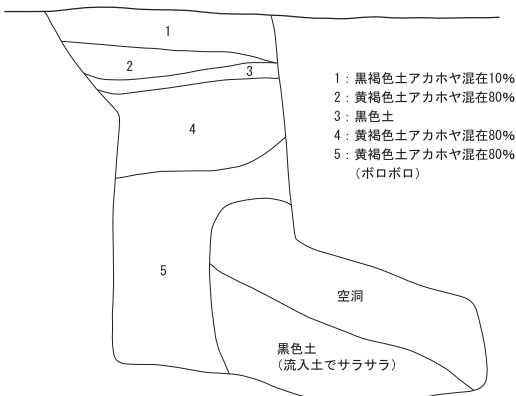
- I アカホヤ、カシワパンを含む黒褐色土
- II アカホヤ、カシワパンのブロックを含む黒褐色土
- III IIに類似するがややしまりのない黒褐色土
- IV しまりのある黒褐色土
- V アカホヤ粒を含み、しまりのない黒色土
- VI アカホヤ粒を多量に含む、しまりのない黒色土
- VII アカホヤ粒を含む黒褐色土
- VIII アカホヤ、カシワパンを含むしまりのない黒色土

立切20号墓



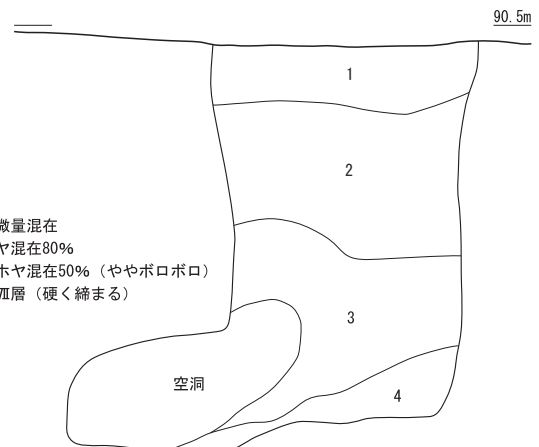
- I アカホヤ土を多量に含むしまりのない黒褐色土
- II アカホヤを含み、よくしまっている黒褐色土
- III 混入土をあまり含まず、全くしまりのない黒色土
- IV Iよりややしまりのある黒褐色土

立切25号墓



- 1: 黒褐色土アカホヤ混在10%
- 2: 黄褐色土アカホヤ混在80%
- 3: 黒色土
- 4: 黄褐色土アカホヤ混在80%
- 5: 黄褐色土アカホヤ混在80% (ボロボロ)

町田堀3号墓



- 1: 黒色土アカホヤ微量混在
- 2: 茶褐色土アカホヤ混在80%
- 3: 黒茶褐色土アカホヤ混在50% (ややボロボロ)
- 4: 黒茶褐色土VI・VII層 (硬く締まる)

町田堀55号墓

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第10号

発行年月 2018年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <http://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
